



ミャオ／モン女性をとりまく 刺繍と文字

みやわき ちえ
宮脇 千絵

総合研究大学院大学博士後期課程

刺繍は「日記」か？

中国雲南省に居住する少数民族ミャオ族（自称モン）は、その衣装を装飾する刺繍の華やかさで有名である。先行研究では、刺繍には文字の機能があると説明している。ミャオ族は独自の言語を有するが、文字をもたなかったため、読み書きができる人はほとんどいない。そのため刺繍の図案は、ミャオ族女性の日々の出来事をつづる「日記」のような役割をもつと解釈され、ミャオ族のなかにもこの説を受け売りする者もいる。

しかし調査をすすめるなかで、わたしはこの定説を誇張ではないかと考えるようになった。女性たちに尋ねても、刺繍と文字の関係どころか、図案の名称や意味さえ明確な答えは返ってこない。また彼女たちは、刺繍の図案を自分で創造するよりも、他人の衣装にほどこされた刺繍を見本とし、模倣することのほうが多い。刺繍の図案は確かに、花や蝶、鳥といった身近な自然をあらわすものが多いが、とても日々の出来事をつづる「日記」だとは思えなかったのである。

能力を引き合いに出し、それらを対比させたのである。

「本を読み始めたから刺繍をしなくなった」

その後わたしは、アメリカでモンの人びとと交流する機会をえた。モンとは、雲南省のミャオ族をルーツとする東南アジア大陸部に居住している人びとで、ベトナム戦争後の一九七六年以降は難民として欧米にも移住している。アメリカで知り合った四〇代のモン女性は、ラオスで生まれ、八歳のときに難民としてフランスに渡り、そこで博士の学位を取得した後アメリカに移住した。高学歴であり、モン語・フランス



隣家の洗濯物の刺繍の図案を真似する女性



雲南省農村のミャオ族女性たち

「文字を知らないから服を作る」

雲南省のミャオ族のあいだでは、この十数年で服作りに変化が訪れている。定期市で綿や化

語・英語のマルチリンガルでもある。

彼女に服作りについて聞くと、「ラオスでは母親から刺繍を習っていた。初めて自分で刺繍をした帯は今でも大事に置いてある。でもフランスに行つて本を読み始めてから刺繍はしなくなった。」とのことであった。彼女は本を読むことが、刺繍に取って代わったと説明したのである。思いがけず、異なる地域で、まったく異なる人生を歩んできた同年代の女性二人から同じ意味合いの発言を聞き、両者の繋がりを感ずるとともに、再び刺繍と文字の関係が気になるようになった。

刺繍と文字の関係

それでは、刺繍は本当に「日記」なのだろうか。前述の二人の発言からは、少なくとも刺繍をおこなうことは、文字の習得に置き換え可能な行為だと考えられているといえるだろう。しかしやはり刺繍が日々の出来事をつづった「日記」だとは思えない。刺繍の出来栄は、常に女性たちの話のたねである。評判のよい図案は、その名称や意味が顧みられることなく、「きれい」「好き」という感情の優先によって、真似し真似され流行のごとく広まっていく。「日記」というよりむしろ、ミャオ族女性同士の交流の軌跡だととらえられないだろうか。

ところで最近、雲南省のミャオ族のあいだで、文字の刺繍をみかけるようになった。漢字で自分の名前や「北京奧運会（北京オリンピック）」など世相を反映した文字を刺繍したり、意味も

織の布が入手できるようになり、染織をする者は減った。しかし場所や準備の手間がかからない刺繍だけは、農作業の合間の仕事として中高年の女性はもちろん、一〇代の少女にも日常のおこなわれている。

調査中のある日、新年にむけて服作りをする居候先の母親の隣で、わたしはフィールドノートの整理をしていた。普段からわたしはメモを書いたり、本を読んだりするのを、女性たちはどう感じているのだろうと思っていた。好奇心をもってわたしのノートを覗き込んでくるのは、学校教育によって漢語（中国語）を習得した男性や若者ばかりで、女性にはわたしの読み書きの行為と距離を置いている気がしていたのだ。そんなとき、居候先の母親が何気なくつぶやいた。「あなたは本を読んで、わたしは服を作る」。「わたしは一度も学校に行つたことがないから文字を知らない。だから刺繍をしたりして、服を作るしかない」と。これはわたしにとって、印象的な台詞だった。彼女は、自分の衣装製作の状況を説明するのに、わたしの識字



スカートにほどこされた「Pleasure」との刺繍は、図案か文字か？



刺繍はクロス・ステッチ技法である

知らずに英文を刺繍していたりする。これも流行中の図案のひとつとみなすべきか、それとも文字を習得した若い世代から発せられた「刺繍と文字の融合」というあらたな現象だとみなすべきなのか。まだまだ気になる問題である。